

# リニア環境に苦言続々

リニア中央新幹線の環境影響評価について、県の審査会で委員から疑問の声があがっている。2027年の東京・品川～名古屋開業まで10年以上かかる大工事にもかかわらず、JR東海の環境への配慮が足りないとの指摘も中心。審査会は3月に答申を知らせ出すが、委員らの厳しい意見が盛り込まれる見通しだ。

## 県審査会委員



県の環境影響評価審査会  
＝17日午後、横浜市中区

# 「JR東海の資料に不信」

「数字が違う。信じてい」だ」というのが、どうも大丈夫の疑問だ。「二大丈夫」なのか。17日に関われた

県の環境影響評価審査会（会長＝益水茂樹、横浜国大教授。学者や弁護士ら18人で構成）。専門家からはJR東海に対する数々の意見が続いた。

昨年9月にJR東海が県

### ■審査会の各委員から出ている意見

- ・騒音  
・列車の走行騒音が、環境基準を上回る場所がある恐れがある。
- ・水質  
・車両基地周辺の水質のいり川に排水を流して、生物は大丈夫か。
- ・排水を流す川の水質調査の地点数や回数が少ない。
- ・トンネル周辺の井戸や地下水を使う醸造所への影響を調べるべきだ。
- ・交通  
・駅本駅近くにできる中間駅周辺の交通への影響予測が粗い。
- ・文化財  
・遺跡など埋蔵文化財への影響をできるだけ少なくしてほしい。
- ・その他  
・トンネル残土の処理方法が具体的にない。
- ・二酸化炭素の排出量の具体的な低減策を示すべきだ。



に出した「環境影響評価準備書」を審議する4回目の会合。これまでも「環境保護の計画に、リニアディ」がない」「もっと丁寧な資料を出してほしい」などの意見が続出している。

「例えば、残土の処理だ。県内を通る39・4キロのうち、96・7%がトンネル。準備書によると、県内で東京ドーム9・2立方分に当たる1140万立方分の残土が出る。JR東海は9割を再利用する」としている。3割分の360万立方分を車両基地の盛り土に使うこと以外は具体的な処分方法を示していない。

昨年10月の会合で、産業界に詳しい藤倉重光委員「(桜葉林大教授)はいろいろなどころに残土処分場ができ、生態系が破壊されるのが怖い。きちんとしてほしい」と注文を付けた。

# 「水質の現地調査、不十分」

他にも、環境への負荷を検討するベースとなる現地の気象や川の流量などの調査が不十分だとの指摘も多かった。

昨年11月の会合では、河川生態学が専門の丸山隆委員（元東京海洋大助教）が、相模原市緑区鶴岡地区で、できる50坪の車両基地の排水が流れる予定の川の水質の測定を、2地点それぞれ2回しか実施していないとを挙げ、「統計的に意味のあるやり方ではなかった」と指摘した。

「詳細なデータや具体的な対処方法を示していない。JR東海に対し、これでは判断できない」と審査のしようがない」という指摘も相次いでいる。

JR東海は昨年11月の会合で、「国の認可後、具体的な対策を取る場所が決まる。今の設備で、こういっ」たものがあるとお示していた。と釈明。だが、大気科学が専門の片谷孝義委員（桜葉林大教授）が「不十分」という意見さえ出た。

# 答申、厳しい意見か

ある委員は「環境配慮へのやる気があったと感じるので、神奈川県だけ情報は出せない」とJR東海は審査会史上最も多くの指摘や意見を付けたこと。別の委員は「国の手続きにのっとったプロジ」

(久保穂)